

表 腎外傷原因の一覧表

A) 交通外傷	12
バイク	7
自転車	2
歩行中	2
バスの中	1
B) スポーツ外傷	6
スキー	2
サッカー	1
ボクシング	1
ラグビー	1
アメリカンフットボール	1
C) 暴行	5
夫婦喧嘩	2
その他	3
D) 事故	10
スベリ台	3
鉄棒	3
その他	6
E) 労働災害	3
高所より落下	3

する。

〔合併症〕腎外傷のみ70.5%，肝臓4.5%，肺4.5%，肋骨22.7%。交通事故の場合と異なり，スポーツによるものでは腎単独損傷が多い。

〔診断〕DIP，超音波，CT，Angio。

〔治療〕保存的，外科的治療法があるが，85%が保存的療法で治療する。血行が豊富であるので出血もしやすいが，治療もしやすい。また後腹膜臓器であるため，1,000ml程度出血すると，出血によるタンポナーデ状態となり，自然に止血する可能性がある。

損傷の程度が軽い挫傷や軽度裂傷は保存的に，腎莖部損傷や断裂などの高度損傷例は緊急あるいは早期手術を行うことでほぼ意見の一致をみているが，中等度の損傷例ではどうするのか，意見が分かれている。

Petersonの手術適応：①腎莖血管損傷，②断裂や粉碎，③出血性ショックの進行，④腎盂・尿管の断裂，⑤腎周囲血腫の増大，以上は緊急あるいは早期手術の適応，⑥腎被膜外への溢流，⑦感染の合併，⑧腎機能の低下，⑨受傷部より下部の閉塞，⑩病的腎に合併，以上は待機手術の適応とされる。いずれにせよ，スポーツによる腎損傷は比較的軽傷のものが多く，早期診断により多くの合併症を予防しうる。

〔症例〕42歳，男性。既往歴，家族歴に特記すべきことなし。現病歴：1991年6月2日，午後4時頃海岸でウインドサーフィン中に誤って自分のサーフボード

で左腰背部を強打した。瞬間は激痛であったが，5分ほどで疼痛は多少軽減したため放置していた。帰宅後尿が赤っぽいのに気づき，救急外来受診。尿検査にて赤血球が各視野に多数認められ，DIP，CTを施行した。腎損傷の診断にて入院となる。入院時現症：血圧126/70mmHg，脈拍68/分，外表上明らかな裂傷を認めなかった。

2. 鼻骨骨折とスポーツ

(耳鼻咽喉科)

長田恵子・黒田令子・
高山幹子・石井哲夫

1988年9月から1991年8月までの3年間の当科初診の鼻骨骨折48症例について，スポーツを原因とするものを中心に検討を行った。この3年間の当科初診患者総数19,569例の内，鼻部の外傷を主訴とした症例は69例(0.35%)，このうち鼻骨X線撮影で骨折線が認められた鼻骨骨折症例は48例(69.6%)であった。受傷年齢は10歳代から40歳代までが全体の85%を占め，特に10歳代と20歳代で58%を占めた。男女比は2：1で男性が多かった。受傷原因は喧嘩によるものが最も多く23例(48%)，次いでスポーツ9例(18.8%)，交通事故6例(12.5%)，その他衝突，転倒，飛び降りによる自殺未遂と続く。スポーツの内訳は，野球やゴルフのような剛球とぶつかったり，バスケット，サッカーやラグビーのように人と衝突する機会の多い球技が77.8%を占めた。

他施設の報告と比較すると，受傷年齢はほぼ一致する。一般に男女比は4：1であるのに対し，当科では女性の症例の占める割合が多い。受傷原因では，一般にスポーツが最も多く，40%前後を占めるのに比べると，スポーツ例が少なく，喧嘩例が多かった。

一方，鼻部の外傷を主訴として受診しながら，骨折線の認められなかった症例が21例あるが，そのうちの9例(42.9%)がスポーツを原因とするものであった。このことはスポーツを原因として鼻部の外傷を主訴に受診した症例の半数(18例中9例)に骨折線を認めたということになる。

治療は受傷後2週間以内に非観血的整復を行うが，48例中整復術を施行したのは15例で，そのうち入院して全身麻酔下に行ったものが9例(60%)，外来で局所麻酔下に行ったものが6例(40%)であった。

4. Papulovesicular light eruptionの3例

(第二病院皮膚科)

斎藤直子・栗村理恵・
高橋佳代子・石崎純子

昨今，屋外スポーツが盛んになり，皮膚の露光機会が